# 風水譚

## 第６号

## 明治維新150年記念号

**旧山口藩庁門**
**（山口政事堂正門）**

藩主毛利敬親は幕末の有事に備え元治元年（１８６４年）藩政の本拠地を萩から山口に移し山口政事堂を建てた。山口政事堂は山に囲まれた天然の要塞で周囲は砲台・土塁・水濠を備えた西洋式城郭であった。

藩庁移転後に幕府に恭順する佐幕派が藩政を握ると正門を含む殆どの建物が破却された。しかし、その後討幕派が実権を取り戻すと山口藩庁として再建された。以降、藩政は正式に山口を拠点とすることになった。

破却・再建と幕末の潮流に翻弄されつつ、桂小五郎、高杉晋作、久坂玄瑞等、若き志士達が足早に駆け抜けて往くのを見守っていたであろう藩庁門。今はただ、昔日の面影を残し、県庁西口にひっそりと佇んでいる。

蒙談会発行

# 七卿松茸狩りの宿

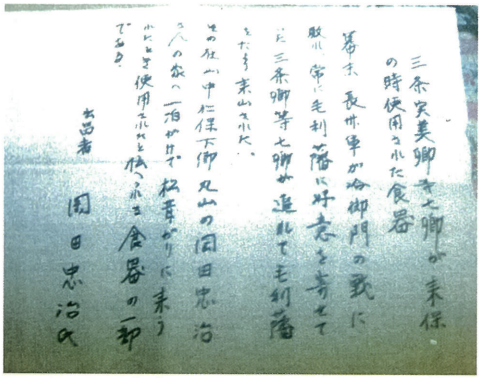
柴田眼治

山口市仁保に丸山というところがある。歴史のある場所で縄文時代の甕棺が出土している。その丸山に岡田さんという人の家があり、ここは文久三年（一八六三）八・十八の政変で都落ちして山口に下向し、滞在された七卿が元治元年（一八六四）秋に松茸狩りに来られた縁（ゆかり）の場所だ。

昭和五十三年八月。病院で内田伸先生のその講演を聴いた。先生は大内氏や明治維新史にも詳しい。この時、七卿のうち五卿（錦小路頼徳公と澤宣嘉公を除く）の無聊（ぶりょう）を慰めようと奇兵隊士らが護衛して湯田の高田御殿や氷上の眞光院に分宿していたお公卿さんを馬に乗せて大内から仁保の丸山にご案内したという。その途中長野に小川のほとりに茶店があって一同一服したところお公卿さんの一人が、煙草入れを忘れたので隊士が取りに戻った。

当時、岡田家はこの辺りの本陣で庄屋をつとめていた。その裏山は松茸がよく採れた。屋敷を幔幕で囲って人が近付かない

よう警護する中、お公卿さんを山の奥へと案内された。貴人に背を向けてはならないと岡田さんが後ずさりして茸【山口では松茸、シメジ、クロコなどを総称して茸という。】を指して、「こちらが松茸でございます。どうぞお摘み下さい。」と云うとお公卿さんは初めてのことで大喜びで松茸狩りを楽しまれた。お昼は松茸のお料理尽くしであったという。この時のお茶碗は近隣の窯で急遽焼成した地元の焼き物（写真）を用意し、お膳は「素木の三方」を調整して準備した。最後の新鮮な柚子の上三分の一を切って繰り抜いて作った柚子味噌は大好評だったという。


三条実美卿等七卿が来保の時使用された食器
幕末、長州藩が禁御門の戦に敗れ、京に毛利藩に好意を寄せていた三条卿等七卿が逃れて毛利藩をたよって来山された。
その在山中仁保下御殿山の岡田忠治さんの家へ一泊されて松茸狩りに来られた。使用された食器の一部である。
お話者　岡田忠治氏

さて、この話には後日談がある。現当主の岡田忠治氏に伺ったところでは昭和三十八年山口国体で天皇、皇后両陛下が行幸啓され山口市湯田温泉の山水園にお泊りになられた。その夜、お付きの宮内庁職員から岡田さんへ電話があり、天皇陛下は「松茸がお好き」皇后陛下は「シメジがお好き」である。「周りに知られぬよう密かに届けるように」とのことである。岡田夫妻はびっくり仰天して夜明けとともに

お公卿さんが使用されたお茶碗

山に入って立派な茸を摘んで、入れ物は奥さんの反物の新しい桐の箱に裏白の上に敷き詰めて宿舎に運んだという。

両陛下は大変喜ばれ、後に、当時の橋本正之山口県知事から贈られてきた感謝状を拝見させてもらった。宮中では維新回天の七卿と山口との歴史を大事に考えておられるのだろうと思った。

七卿落ちの石碑

七卿落ち

岡田家の入口に「七卿松茸狩りの宿」と書かれた石碑が建っている。内田伸先生が三条実美のお孫さんで鎌倉宮の三条実愛宮司に揮毫していただいた石の彫刻である。

○

七卿に
ゆかりの宿の
茸かな

柚子の味噌
つくる気配の
厨かな

八雲
「ふしの句集」

# 木彫神馬の奉納の謎

八田ひろいち

山口大神宮

1820年木彫の神馬奉納　文政3年

木彫神馬

文政3年（1820年）に寄進されたもの作者は山口の工匠安永貞右衛門
和田三郎左衛門の名馬をモデルに三年がかりで完成。木彫りの神馬は全国的に稀。

## 今八幡宮

馬の上に猿の字

1817年奉納
（文化14年）

現在は南向き（毛利輝元の孫綱広が移築）

## 桜木神社　大内矢田の氏神様

1817年奉納（文化14年）

## 長野八幡宮　大内長野

## 舟山八幡宮　仁保の市（いち）

舟山八幡　右横にある天満宮

この神馬が各社へ奉納された頃は一揆が続き、

日本海側に外国船が山口を窺い

人々は不安に思っていた。

萩往還の木町にいた大工の耳に入り

神へ安全祈願をするため、

山口中の神々に奉納したのではないかと考える。